# 清水八中グループ　　令和５年度　　学校評価書

| | 大項目 | 中項目 | グループ校の評価指標 | 自己評価 | 学校関係者評価委員会から | 改善策 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 静岡型小中一貫教育における特色ある教育活動 | 【視点１】<br>学校教育目標「自ら学び自ら切り拓く心豊かな人江の子」グループ校で共有 | （１）チャレンジ・本気の挑戦の具現化に向けて主体的に自ら学ぶ、思いやりのある心豊かな子どもを育てる | ①めあてをもって、進んでチャレンジをしている。<br>（学校説明）中学校では、「本気の挑戦を意識して学校生活を送ることができた」というアンケート項目で、肯定的な回答が生徒は85%、職員は100%、保護者は74%であった。今後は、ステージの振り返りを充実させ、生徒の自己肯定感を高めていきたい。また、生徒の頑張りを保護者にも積極的に伝えていきたい。<br>小学校の職員は、めあてを意識させて指導したことで、学習・生活・運動のめあてをたててそれぞれがめあての達成を目指して取り組む児童が多い。（81.2%）しかし、めあてを達成するために粘り強く継続して取り組むという点では課題が残るため、めあて達成のための具体的な手だてを指導していく必要がある。また、保護者にも学校での取組を周知していきたい。 | A | 地域にいると学校便りを頂くが、学校公開日や行事の時にしか児童や生徒の頑張りを知ることができない。地域の方々を行事に招いたり、生徒たちの姿を発信したりすることがどれくらいできるか、<br>また、参加できない保護者の方々にどうアプローチしていくかが課題である。 | ・学校行事や授業参観等子どもたちの頑張る姿が見られる機会を増やしていく。<br>・学校便りや学年便り等の紙ベースはもちろんのこと、学校HPやICT機器を使い、日常的な児童生徒の活動を保護者や地域に伝えていく。 |
| | 【視点２】<br>９年間の連続性、系統性を強化した教育課程を編成・実施する | 「人江スタイル」 | | | | |
| | | （２）確かな学力の育成<br>【市共通項目１】<br>（基礎基本の定着） | ②子どもたちは、わかろうとして聴き、課題解決に向けて、進んで話し合いをしたり、反応したりしている。<br>（学校説明）中学校の生徒アンケートからは、肯定的回答が84%を占めていた。生徒は落ち着いた態度で授業に臨み、研修の手だての一つである対話的活動を通して自分の考えを再構成する姿が見られた。知識・技能の定着に差があるため、同じ度量で学びが深まるための手だてを考える必要がある。<br>小学校の児童アンケートでは、「授業中に友達の話をしっかりきいている」81.2%(昨年比↑10%)、と「聴く」ことに意識が高い反面、「授業中進んで発表している」56.4%(昨年比-1.6%)と回答している。「聴く」意識の高まりの半面で、自分の思いを伝えることにハードルを感じている児童が約半数いると言える。 | A | 子どもにとって「教科の本質」や「学びのおもしろさ」をいかに伝えていくか、教師の力量となる。聴くことができるということは、発言がなくても「分かりたい」という思いや興味・関心を抱いて、授業に前向きに取り組んでいるという証拠。<br>ワークシートの工夫や小集団での対話の場の設定などの取組が必要である。「成就感」「達成感」を味わわせて意欲を高める手だてを施せるとよい。 | ・自分の意見を言いたくなるような小集団での場を設定する。手を挙げるだけでなく、ノートなどで思考の変遷がわかるような手だてを講じることで一人一人の思いや考えを拾う。<br>・個別最適化を図り、一人一人に合った学習方法でより力を付けていけるようにしていく。 |
| | | （３）研修体制の充実<br>【市共通項目９】 | ③教職員は「友達と関わることで考えを深める子」の育成をめざして、対話を軸とした授業改善に意欲的に取り組んでいる。<br>（学校説明）中学校では、職員アンケートの研修テーマ「生徒が『学びのおもしろさ』を実感できる授業づくり」について、95%の職員が授業づくりや授業改善に活かすことができたと感じている。教科ごとに「おもしろさ」を共有し、教材の精選、生徒の思考の流れを大切にした授業展開の工夫、また必要感のある対話的活動の位置付け、主体性を引き出す課題の設定など、生徒の学習意欲につなげることができた。<br>小学校では、一人一公開授業を中心に、研修テーマの具現化に向けて全職員で研修に取り組んだ。また、夏季休業中にICT機器の使い方講座や、デジタルドリルの講習、外部講師によるICT教育についての研修などを設け、授業改善に確実に取り組んだ。 | A | 先生方のアンケート結果は素晴らしく、学校参観の際の落ち着いた授業の様子からも先生方の努力が伺える。研修テーマの一つである必要感のある対話的活動の位置付けがポイントとなるであろう。<br>また、ICT機器の使い方講座や研修に取り組んだため、以前に比べICT機器を活用できる幅が広がった。これは、ICT機器を得意とする先生を中心に学校体制で取り組んだ成果であるといえる。 | ・今年度同様研修部を中心として、研修テーマに沿った授業実践・事後研修を積み重ねていく。<br>・ICT研修を研修時間に位置付け、全職員でICTスキルを高めていく。 |
| | | 「人江スタンダード」「人江サポート」 | | | | |
| | | （４）どの子にとっても居心地の良い環境づくり特別支援教育の推進・校内支援体制・UDを取り入れた環境<br>【市共通項目４・７】 | ④教職員は計画的・組織的に子ども理解に努め、個々のよさを認め、子どもの自己肯定感・自尊心を高めている。また個々の困り感や特性に応じた特別支援教育の推進、及び組織的な校内支援体制の充実と専門機関との連携・対応を行っている。<br>（学校説明）中学校では、学校生活環境を問う質問で肯定的回答が82.3%であり、就学支援を含め、個に応じた支援を推進することができた。また、ＵＤの視点を取り入れた環境作りを実践するとともに、小中でＵＤに関する情報交換を行うことができた。また、教室に限らずに生徒に居場所を提供した。<br>小学校では、子どもの理解を深めるために、表れを共有する時間をとっている。年間3回の子どもを語る会、週に一度の打ち合わせの時間、悩み事アンケートを活用してどの子にとっても居心地のよい環境づくりを目ざしている。クラス全体へのUD、必要な個別の支援を日々行っている。UDの研修を行ったり、外部機関と連携したりし、困り感のある子どもたちに対応をしている。 | A | 子どもの表れの情報共有を職員ができていることがとてもよい。学校全体で子どもを見ることは大切である。個別の支援計画等を活用して、支援の必要な子に対応できている。不登校の子どもへの支援も、多様になってくるため、保護者や地域と連携して行っていく必要があるだろう。 | ・これまで同様、職員間での子どもたちの情報共有、UD対応、子どもの居場所づくり、個別の支援などを続けて自己肯定感・自尊感情を高める教育活動を行っていく。<br>・UDに先進的に取り組んでいる清水浜田小学校の研修会に参加し、UDに対する理解を深める。 |
| | | （５）コミュニケーション力を高める | ⑤子どもたちは、進んで、学校、家庭、地域で場に応じた気持ちのよい挨拶をしている。<br>（学校説明）　中学校では、肯定的な回答をした生徒が84%、保護者は86%であったが、教員は56%であった。アンケートの聞き方が、生徒や保護者には「気持ちのよい挨拶ができていますか」だが、教員には生徒から進んで挨拶できているか。という項目のため、低かったと思われるため、来年度は三者同一の気持ちよい挨拶にしてアンケートをとりたい。<br>小学校は肯定的な回答が、児童は約84パーセント、教員が約63パーセントとなった。児童会のあいさつ運動などの取組を通じて、挨拶ができるようになっているが、教員は挨拶への捉え方や認識に相違が見られた。「場に応じた挨拶」という観点から考えると、実社会で生きて働く力になるためには、もう一歩である。 | B | 地域・家庭・学校などで、挨拶の場面に数多く出くわすことで、挨拶が身についていくため、目を見て挨拶することやTPOに合わせた挨拶など、土台を作り、習慣付けてあげることが大切である。<br>学年が上がるにつれて場に応じた挨拶ができており、朝の挨拶は比較的よくできている。小中学校ともに子どもと教員のとらえ方の差があるので、アンケート質問内容を見直したい。 | ・なぜ挨拶をするかを考え、そのよさを意識して進んで挨拶ができるように支援していく。<br>・さまざまな挨拶の種類があることを教えることや、教師が自ら「ありがとう・おはよう・こんにちは」など時と場に合った挨拶を使い、伝えていく。 |
| | | （６）道徳教育の充実<br>【市共通項目２】 | ⑥子どもたちは、規律正しく、相手を思いやり、優しい行動をしている。<br>（学校説明）中学校では、生徒の肯定的な回答が88%であった。今後も、道徳の時間や学校生活全体を通して、自分自身の生活や考えを見つめ直したり、他者を大切に思いやる姿を育てていきたい。<br>小学校では、児童の肯定的な回答が約85パーセント、教師が約79パーセントとなった。こちらも（５）と同様、教員の捉え方や認識に相違が見られた。道徳の時間や「かがやき見つけ」など学校生活の様々な活動を通して、子どもの道徳的なよいあらわれを教員から児童へ伝えたり、お互いのよさを生徒同士で伝え合ったりする活動を続けていきたい。 | A | 入江地区の子どもたちの課題はコミュニケーション力と道徳（特に規律の部分）だと感じている。規律の指導は妥協してはいけない。規律が身に付くように、考えさせ、声をかけることを幼小中続けていけたらよい。<br>入江の子どもたちのよいところは、人を手伝いたい、人の力になりたいと思っているところなので、やらせて感謝され、人の温かさを感じる場面をたくさん感じさせたい。 | ・授業中は、名前に‘さん’付けを徹底することで時と場に応じた言葉遣いを教えていく。<br>・これまで同様「かがやき見つけ」等生活の中で自分や友達のよさを見つける活動の位置付け、自己肯定感を高めていく。 |
| | | 「人江スピリッツ」 | | | | |
| | | （７）特別活動の充実<br>【市共通項目３】 | ⑦教職員は児童会・生徒会活動（ペア活動・委員会等）や行事を通して、主体的に考え、判断し、行動する力を育てている。<br>（学校説明）中学校で肯定的な回答をした生徒が79.4%、保護者が88.9%、教員は96%であった。この結果から生徒会活動や生徒会行事に生徒は意欲をもって取り組んでいるといえる。また、その姿を保護者も教員も見ていて子どもの成長を感じられている。<br>小学校の児童集会では、各委員会が主催し、常時活動を報告する場としたので、どのように伝えるかを考え行動する機会を設けることができた。また、全学年を対象に子ども主催で楽しむ会を開催し、主体的に考える力を育めた。どの職員も子どもがやりたいことを実現できるように支援した。 | A | 今年もイリエンジャーの活動ができていてよかった。友達のために動ける子がいるという、よい雰囲気ができている。今後も継続してほしい。アルミ缶回収のCMを八中で作るなど、リモートや機器を使って交流ができていた。 | ・今年度同様生徒会や児童会・委員会が必要に応じて臨機応変に取り組み、必然性のある情報交換・発信が当たり前となるよう支援していく。<br>・来年度は異学年交流の回数を増やし、子どもたちのアイディアや工夫をいかした活動をより広げていく。 |
| | 【視点３】<br>教職員の協働・児童生徒の交流 | （８）児童会・生徒会活動の協働 | ⑧児童会・生徒会が中心になって、家庭・地域と共に資源回収活動（アルミカン・ペルマーク回収運動）等の協働に取り組んでいる。<br>（学校説明）中学校で肯定的な回答をした生徒が81.9%、保護者が70.1%、教員が84%であった。生徒・教師と比べると、保護者の結果が低かったので、学校から地域への発信を意識して取り組んでいきたいと思う。<br>小学校では、福祉委員会が中心となって資源回収活動に取り組んだ。ペルマークは各クラスに回収箱を設置して常時回収し、アルミ缶は子どもたちが楽しく多く持参できるように取組を工夫した。どちらも、中学校と力を合わせて取り組んだ。 | A | ペルマークや空き缶を回収することが、小学校の物品購入などにも役立っていて嬉しい。ペルマークや空き缶の回収は、どの家庭でもやろうと思えば取り組める活動であるため、今後も引き続き継続していきたい。 | ・今後も活動を継続していくためには、教師の負担について考慮する必要がある。学校と保護者が一体となって、役割分担しながら取り組む仕組みを作っていきたい。 |
| | 【視点４】<br>地域と連携する教育をする | （９）信頼される学校づくりの推進<br>【市共通項目10】 | ⑨学校は保護者や学校応援団（ＰＴＡボランティアや地域ボランティア）と連携して、子どもの育成にあたっている。<br>（学校説明）中学校で肯定的な回答をした教員は88%、保護者が85.7%であった。地域防災訓練に向けては20地区すべての自治会長防災会長が地区長と当日の運営や小中学生の役割を協議した。当日、生徒は目的をもって訓練に参加し、地域の人々と協力しながら役割を果たした。また、本の読み聞かせでは、教員に加え、5名の保護者や地域の方がボランティアとして6回の読み聞かせを行い、生徒からも好評であった。<br>小学校では水泳授業や、一年生の給食ボランティア、校外活動の引率、ミシンボランティア、読み聞かせなど、統括的な地域学校協働活動推進員が中心となり、応援団と連携して指導を行った。今後は小中一貫となったいりえPTAとの連携を密にしていくようにしたい。 | B | PTA作業に参加する保護者が少なく、学校応援団の参加者も固定化している。行事等が保護者や地域が学校に関心をもつ機会になるとよい。 | ・紙媒体だけでなく、ホームページやメール配信等を活用しながら、保護者向けに学校行事の周知を広く行うことで関心を高め、ボランティアへの参加率を高めていく。<br>・PTA活動への参加がもっと必要なことやが伝わる広報活動を考えていく。 |
| | 学校環境 | （１０）学校安全システムの構築<br>施設・設備の適切な管理<br>【市共通項目５】 | ⑩教職員は保護者・地域と連携して、子どもの安全を確保している。教職員は月１回の安全点検を複数人で実施し、施設・設備の安全管理を行っている。<br>（学校説明）中学校で肯定的な回答をした教員は100%、保護者が85.7%であった。月1回全職員での安全点検により校内の、校外では地域の方々のあいあいパトロールやPTAによる校外活動によって、安全が保たれていると考える。<br>小学校ではあいあいパトロールによる登校の見守りやPTAと職員での登校指導を実施し、安全指導に努めた。子どもたちの登下校の歩き方に関しては課題が残る。また毎月行っている安全点検により、施設設備の修繕につなげている。施設の老朽化に伴う課題は、教育委員会に相談をして順次進めていく。 | A | 老朽化はどうすることもできない問題であるため、引き続き関係機関との連携を図っていくこと。また、登下校についてはあいあいパトロールと連携しながら安全の確保ができている。 | ・歴史ある学校だが古い校舎であるということや、水害の起こりやすい地域であることを認識し、学校だけの問題にせず、地域や市への働きかけをしていく。<br>・これまで同様、地域・保護者・学校がそれぞれの立場で連携しながら、安心安全な学校づくりに努める。 |
| | | （１１）組織・運営・教職員の業務改善<br>【市共通項目８】 | ⑪教職員は相互理解を深め、協力して教育活動に取り組んでいる。日頃から教職員は校務支援システムの活用（成績処理・出欠・アンケート・ペーパーレス・メール等）により、業務のスリム化を行っている。<br>（学校説明）中学校での職員アンケートで肯定的な回答が40%、否定的な回答が60%であった。アンケートの効率化やペーパーレス化は進んでいるが、職員間の連携がうまくとれないときがあったり、特定の職員に仕事が集中したりすることがあり、勤務超過や疲労感につながってしまう傾向があった。<br>小学校では職員間同士の情報交換を密に行い、教育活動にあたっている。また、今年度より職員打ち合わせに校務支援システムを活用したり、学校評価アンケートにgoogle forms を活用したりすることで、働き方改革につながった。 | B | 端末での学習を行うなど、子どもにも変化が起きている。ペーパーレスなどで効率化は図れているのではないか。学校での仕事量はまだまだ多い現状がある。中学校は部活等、教員の負荷がさらに多い。 | ・部活動は市の取組と地域の実情のすれ違いをすり合わせながら負荷をより減らせるように努力していく。<br>・週日課の見直し、年間授業時数の削減等により放課後の時間の確保に務めていく。<br>・校務支援システムやICT機器のさらなる利活用により、業務削減に取り組む。 |
| | グループ校の軸となる取組・活動 | | グループ校の評価指標 | 自己評価 | | |
| | ９年間を見通した防災学習 | | ⑫地域の特性を知り、地域の一員として、発達段階に応じた防災学習（地域防災）に取り組んでいる。<br>（学校説明）中学校で肯定的な回答をした生徒が83%、職員は100%、保護者は86%であった。生徒と職員については昨年度よりも向上し成果が見られる。今後は、地域防災訓練の参加をはじめ、発達段階に応じた防災教育をさらに充実させていきたい。<br>小・中学生が地域の方々と協力して、12月に行われる防災訓練に参加しており。小学校では子どもの参加率が85%を超えた。学校では、地域の自治会長さんとコミュニケーションをとる場も設定した。今後は、具体的に有事の際に自分がどんな行動がとれるかをシュミレーションしていく活動を取り入れていく必要がある。 | A | 各学年で、発達段階に応じて防災学習を実施してきた。アンケート結果を見ても、防災学習についての成果があったといえる。昨年度から地域での防災活動で、子どもの活躍の場が確保されている。<br>地域の防災組織が発足し、顔を合わせた活動をすることで、地域の結束も強まった。地域と学校が連携していることは強みである。 | ・地震体験や野外活動センターでのテント泊など、実体験を通した防災意識を高めていく。<br>・学校の備蓄のテントを組み立てる経験などを通して、有事の際に自分で考えて行動できる子どもを育成する。<br>引き続き、地域と学校との連携、協力体制を強化して、有事の際に子どもたちの働きが地域の方々の力になるような機会を設ける。 |
| 共通となる教育活動 | 学力の状況 | 小学校<br>中学校 | （学校説明）「国語の学習は大切だ」「算数の勉強は大切だ」の回答率が高く、学習の必要性を感じている児童が多い。国語は目的に応じて、必要な情報や中心となる言葉や文を見つける力が身に付いている。算数は基本的な計算や学習用語の定着している。平均正答率も県平均と同じであった。国語・算数共に記述式の正答率が低い。国語では「自分の考えをまとめて書く力」、算数では数学的な言葉や数を用いて表現する力」に課題が見られる。<br>（学校説明）休日に普段1日4時間以上勉強する生徒が県・全国を上回っている。国語では、情報の扱い方や我が国の言語文化に関する事項の正答率が県・全国を上回り、言葉の特徴や使い方に関する事項は下回った。数学では数と式及びデータの活用の正答率が県・全国を上回り、図形は県を下回った。英語では、読むことの正答率が県・全国を上回り、聞くことは県・全国を下回った。 | | 普段の授業で、思考の変遷が見えるノートづくりができるよう指導をしていきたい。学力を付けていくことはもちろん、自己肯定感が高まる授業を目指したい。 | ・自分の考えをもつ・まとめる力を付けることが重要であり、授業の中で、学習課題に対する自分の考えをもたせる場を設定し、対話を充実させていく。<br>・再構成や振り返りの時間も授業内に確保し、その授業での学びや成長を子どもが実感できるようにし、自己肯定感の向上にもつなげていく。 |
| | 体力の状況<br>【市共通項目６】 | 小学校<br>中学校 | （学校説明）新体力テストは全8項目のうち、4項目において全国平均を上回り、3項目は下回った。全国と比較して瞬発力や力強さの項目が高い結果となり、持久力や柔軟性に課題が見られた。また、休み時間に外に出て遊ぶ児童はあまり多くなく、積極的に外遊びを推奨していくことも取組の一つとして考えていきたい。<br>（学校説明）　体力テストの結果は、男子の1,2年生では上体起こし、持久走、ハンドボール投げが全国平均を下回ったが、その他の種目では、全国平均を上回った。3年生男子は、持久走以外で全国平均を上回った。女子では、どの学年も反復横跳び、長座体前屈、50m走、立ち幅跳びで全国平均を上回り、2年生女子は持久走種目以外で全国平均を上回った。八中全体を見ると、男女ともに「敏捷性」「柔軟性」「スピード」「瞬発力」が全国平均より優れており、課題としては、持久走で全国平均を超えられる学年・性別がなかったことである。このことから本校では「全身持久力」の向上が課題である。 | | 子どもが遊べる場や運動をする環境が少なくなっている。小中学校9年間の長いスパンで体力・持久力を付けていってほしい。 | ・遊具や道具などを使うことで遊びの種類を増やし、様々な動きをするようになる。そうした中で巧みに体を動かす能力を高めたり、力強く体を動かす能力を高めたりする工夫をしていく。<br>・持久力を付けるために、発達段階に応じた内容（持久走や短なわ、長なわ等）に取り組む。 |
| | 生徒指導の状況<br>（学校いじめ防止基本方針）<br>【市共通項目１１～１３】 | | （学校説明）いじめ問題が発生した際、教職員は校内いじめ対策委員会に報告して対応について協議し、組織的に対応している。年3回の悩み事に関する調査を確実に行い、訴えがあったものについては必ず聴取を行い、早期解決に向けて取り組めた。いじめの認知や解消に向けた取組に関する研修資料を教職員で共有し、対応力の向上を図っている。<br>小学校では5月の調査で、いじめを受けていると感じている子が4.8%で、10月は4.1%いることがわかった。その後、学級担任が全員に聞き取りを行い、解決に向かっている。困っていることや悩んでいることを助けてほしいと訴えることができる関係を、子どもと職員とでつくることを継続していきたい。また、どこの学年でどのような悩みが出ているのかを共有するため、子どもについて話し合う場を設けている。 | | いじめに関してだけでなく何かトラブルがあったときに、被害者加害者両方によく話を聞いて指導をしていくことをこれからも大事にしてほしい。 | ・小中学校で生徒指導の核となることを共有し、小中学校で挨拶運動を行ったり、校則を見直したりしていくことで、子どもたちがのびのびと安心して過ごせる地域づくりを続けていく。 |